



育てる側を育てる・支援する分科会 の報告・提言



平成26年8月21日

分科会での議論の経緯

【分科会1回目】H26.5.20開催

○ 分科会の検討の視点を念頭に置き、各委員がそれぞれの経験や見識からのご発言や他市などの先進事例もご紹介いただきながら、保護者等が円滑に子育てしていける環境を目指す取組みについて議論し、下記のとおり事務局で整理しました。

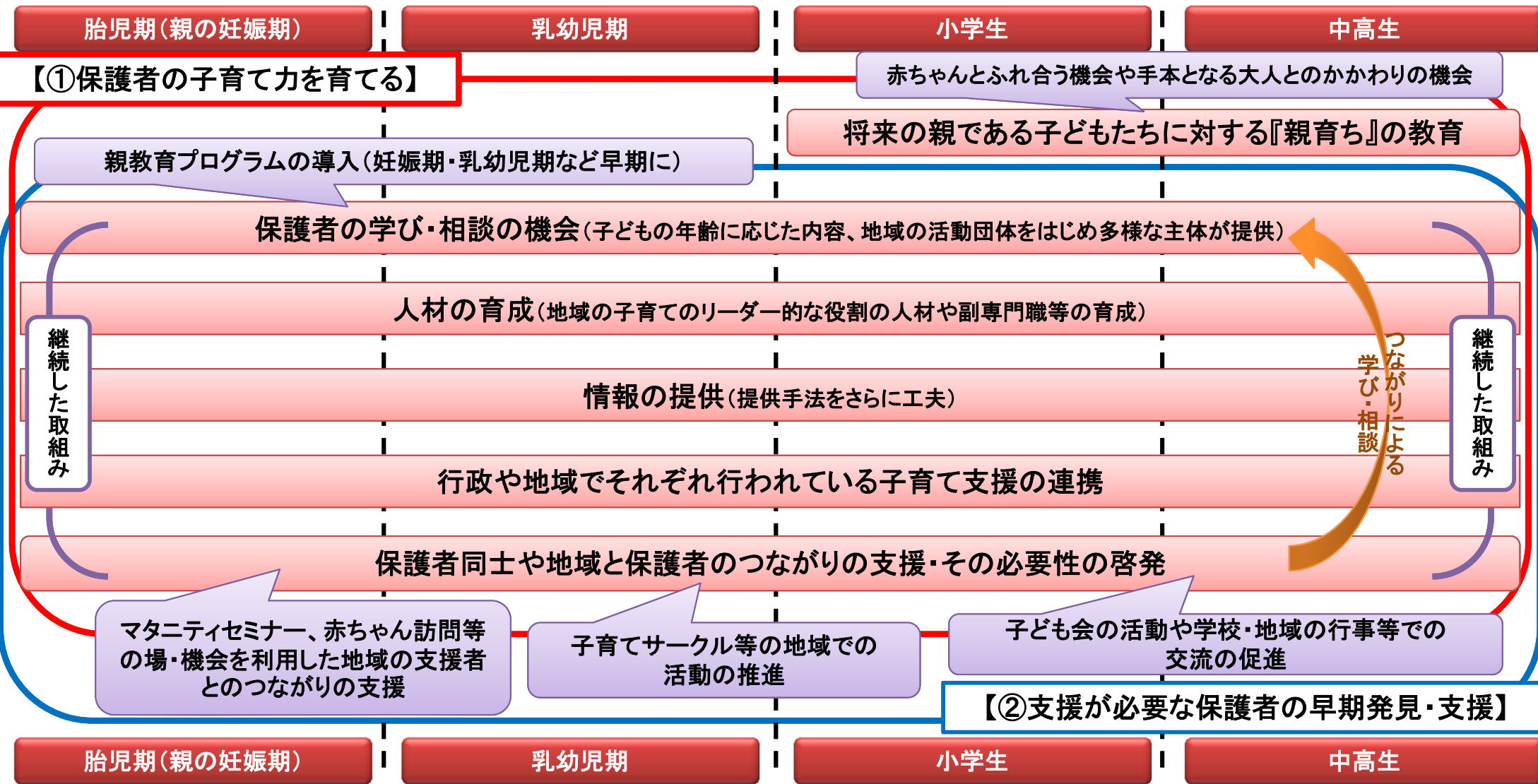
	課題	解決に向けた方策(課題に関するご意見)
①	保護者同士のつながり (保護者の孤立、保護者同士の関係が地域で不足)	<ul style="list-style-type: none"> ・有形・無形の保護者をつなげる支援 ・小学校区や地区ごとの行事などを生かしたつながりづくり ・地域のサークル(コミュニティ)への参画による関係づくり ・共通項を持った人がゆるやかにつながる場
②	相談・勉強の機会 (保護者は学びたいと思っている)	<ul style="list-style-type: none"> ・気軽に参加できる相談・勉強の機会 ・相互に育児の相談をすることにより学び合う ・子どもの成長・ライフサイクル等に随時対応できるような学びの機会 ・母親、父親、家族、地域等すべての人に勉強の機会 ・母親の悩み、満たされない気持ちに照準 ・親教育プログラムの導入(妊婦・乳幼児期などできるだけ早いうちに) ・提供者は行政に限らず、地域のサークル等多様に
③	ひとり親への支援	<ul style="list-style-type: none"> ・公的支援、地域住民の協力を肯定的に活用
④	情報提供の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・情報提供の手法の工夫
⑤	いずれ問題として表出する可能性のある家庭へのアプローチ (問題として表面化しないと行政の介入が難しい)	<ul style="list-style-type: none"> ・問題への対応だけでなく、予防も重視
⑥	将来の親である子どもたちを育てる	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの大人がお手本となって子どもに関われる機会
⑦	保護者と地域とのつながり	<ul style="list-style-type: none"> ・地域のつながりの重要性の啓発 ・学校の校長先生のリーダーシップ
【その他のご意見】	<ul style="list-style-type: none"> ・広く浅くではなく、ポイントを絞って100点を目指す ・母子手帳配布時など既存の機会の見直しによる保護者と支援者とのつながり 	

【分科会2回目】H26.7.3開催

○ 上記整理した課題や解決に向けた方策を確認し、本市で特に取り組む必要がある課題として大きく2つの課題を掲げました。この課題に対する取組みや支援について議論を深め、次頁のようにあらためて整理し、まとめました。

本市として特に取り組む必要がある二つの課題とこの課題に対する方策

- 本市で特に取り組む必要がある課題として「保護者の子育て力を育てる」、「支援が必要な保護者の早期発見・支援」の2点を挙げました。
- これらの課題に対する方策としては、現在の制度・事業等の継続はもちろんのこと、「保護者の学び・相談の機会の提供」、「保護者同士や地域と保護者のつながりの支援」、また「将来の親である子どもたちに対する『親育ち』の教育」が必要であることなど、育てる側を育てる・支援する取組みについて様々なご意見がありました。
- 下記の概念図のとおり、子どものライフステージを横軸にとり、分科会でご意見いただいた課題に対する方策について、課題ごとに赤い枠・青い枠でそれぞれ囲って整理しました。
- 子どものライフステージによって、保護者の悩みは異なり、これを支援する内容も変遷していき、次のステップとして各ライフステージごとに求められる事業や取組みを整理していく必要がありますが、これらの取組みを関係機関の連携等により継続して取り組んでいく必要性を確認しました。



分科会での課題と解決に向けた方策の整理

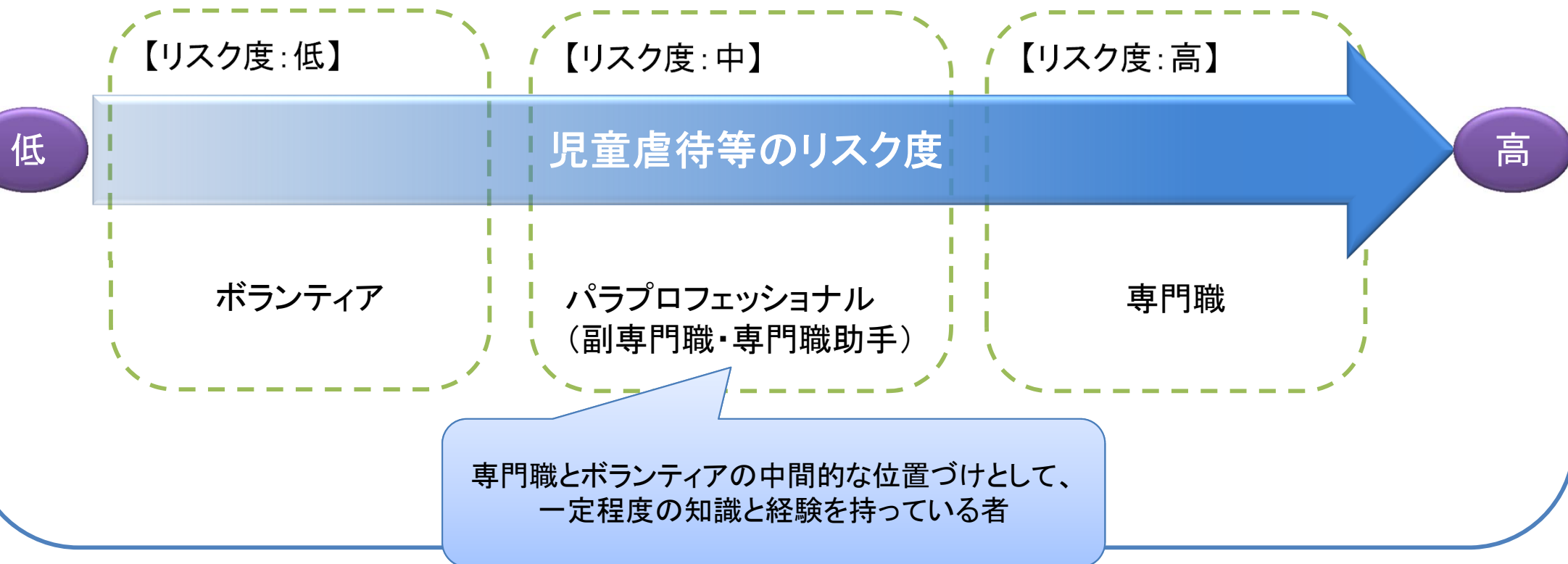
	課 題	課題の詳細・明確化	解決に向けた方策(下線は注意点)	施策・取組みの例など
①	保護者の子育て力を育てる	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の孤立、保護者同士の関係・コミュニケーションが不足 ・地区によっては子ども会がなく、地域での交流が不足 ・保護者は学びたいと思っている ・情報提供の在り方に工夫が必要 ・将来親になる子どもたちを育てるという視点も大事 ・母親になるまでに小さい子と接する機会の少なさ 	<ul style="list-style-type: none"> ●保護者等の学び・相談の機会(子どもの年齢に応じた内容、地域の活動団体をはじめ多様な主体が提供) <ul style="list-style-type: none"> ・身近で、子どもの成長に合わせた学び ・子どもとの接し方や叱り方などを学ぶ機会 ・コミュニティの中で、困っている人同士が互いに悩みを打ち明けられる、相談し合える機会 ▶<u>小さい子どもがいる間に養成のプログラムを行うと意識が変わる</u> ▶<u>学ぶ機会は、母親以外に、父親、家族、地域等にも必要</u> ▶<u>学びの提供主体は、行政のほか、子育てサークル、先輩ママ等色々あっていい</u> <ul style="list-style-type: none"> ●将来の親である子どもたちに対する「親育ち」の教育 ●人材の育成(地域の子育てのリーダー的な役割の人材や副専門職等の育成)(詳細は、P5・6を参照) ●情報の提供(提供手法をさらに工夫) ●行政や地域でそれぞれ行われている子育て支援の連携 ●保護者同士や地域と保護者のつながりの支援・その必要性の啓発(詳細は次ページ参照) 	<ul style="list-style-type: none"> ・親教育プログラムの導入【妊婦・乳幼児期などできるだけ早いうちに】 ・ファシリテーター養成講座 ・子どもとの接し方や叱り方などを学ぶ機会 ・子どもが0歳児の時のプログラムを充実させ、その時期に親の育児能力を向上させる ・赤ちゃんと触れ合う機会 ・手本となる大人とのかかわりの機会

	課 題	課題の詳細・明確化	解決に向けた方策(下線は注意点)	施策・取組みの例など
②	支援が必要な保護者の早期発見・支援	<ul style="list-style-type: none"> ・いずれ問題として表出する可能性のある家庭へのアプローチ(問題として表面化しないと行政の介入が難しい)⇒早期発見が必要 ・ハイリスクな保護者はつながりにくい ・保護者の孤立、保護者同士の関係・コミュニケーションが不足 ・地区によっては子ども会がなく、地域での交流が不足 ・ひとり親の中には、他の力を借りず、一人で子育てを頑張ろうとする人もいる ・情報提供の在り方に工夫が必要 ・母親が出産しても地域で支えてくれる人がいる情報がない 	<ul style="list-style-type: none"> ●保護者同士や地域と保護者のつながりの支援・その必要性の啓発 <ul style="list-style-type: none"> ・マタニティ時代からの保護者同士や地域とのつながり ・地域のつながりの意識の醸成⇒地域のつながりの重要性を理解できれば、自発的につくるようになる ▶<u>育児の不安や疑問は、他人に相談してアドバイスされることで疑似体験でき、学んでいくことができる</u> ●人材の育成(地域の子育てのリーダー的な役割の人材や副専門職等の育成)(詳細は、P5・6を参照) <ul style="list-style-type: none"> ・各地域でのリーダーの養成 ▶<u>人材の育成については、継続性を考慮し、ボランティアではなく、専属的に担う人材の養成</u> ●情報の提供(提供手法をさらに工夫) ●行政や地域でそれぞれ行われている子育て支援の連携 ●保護者等の学び・相談の機会(子どもの年齢に応じた学び・相談)(詳細は、前ページ参照) 	<ul style="list-style-type: none"> ・マタニティセミナーの際に、地域の支援者との交流 ・母子手帳の配布場所を子育て支援センターにすることで、妊婦と支援者がつながり ・小学校区や地区ごとの行事などを生かしたつながりづくり ・地域の公民館などでの赤ちゃんの体重計を測定するなどのきっかけづくりによる保護者同士の交流 ・色々な人の力を借りて子育てすること、子どもを積極的に地域に出すこと等のメッセージを発信 ・地域のサークル(コミュニティ)への参画による関係づくり ・一定のリスクのある家庭にも対応できるパラプロフェッショナル(副専門職・専門助手)の育成 ・主任児童委員と保健師との協力による乳幼児家庭への全戸訪問 ・行政の縦割りを改善

人材育成のイメージ①

- 支援を必要とする保護者の早期発見・支援等を行う人材については、児童虐待等のリスク度の高低に応じて、支援者として求められるスキルも変わる点、また、専門職とボランティアの中間的な位置づけとなるパラプロフェッショナル(副専門職・専門職助手)の人材が求められている点などを確認しました。

児童虐待等のリスク度に応じた支援者像【イメージ】



※参考文献:

・Hiatt,S.W.,Michalek,P.,&Younge,P.(2000).Characteristics of volunteers and Families in a Neonatal Home Visitation Project : The kempe Community Caring Program.Child Abuse & Neglect,vol.24,No.1.p.95.「家庭訪問サービスの連続体」

・『子ども家庭支援員マニュアル:地域の子育て支援と児童虐待防止のために』(桐野由美子、家庭訪問支援プロジェクトチーム編著)(2003)

課題に対する方策・支援に関する主なご意見①

○ 整理した課題に対する方策に関して、全2回開催した分科会の中で、各委員から次のようなご意見をいただきました。

保護者等の学び・相談の機会(子どもの年齢に応じた内容、地域の活動団体をはじめ多様な主体が提供)

- 今の保護者は、自分のスキルアップを望む人が多い。子どもとの接し方や叱り方などを勉強したい人が多いので、そういう支援が必要。これまで講演会などがあっても、人が集まらなかった。もっと気軽に参加できる子育ての勉強会、自分の子育て方法に「大丈夫だよ」と言ってもらえるような機会を作れると変わっていくと思う。
- 乳幼児期だけではなく就学以降も、発達・成長にともなって悩みは変化し、尽きることはないが、それに随時対応する学びの機会が不十分。
- 親教育プログラムは、虐待防止、怒りのコントロールなどに有効なプログラムが提供されており、導入している市町村が結構ある。玉城町では“NOBODY’S PERFECT”(完璧な親などいない)というプログラムを町が導入し、頻りに機会を作って、母親たちが目に見えて変わっていく経験をしている。乳幼児期の母親にプログラムを実施すると、後の子育てが楽になると思う。
- 学ぶ機会は、母親以外に、父親、家族、地域等にも必要。
- 本当に悩み、苦しんでいる人は直にそこにアクセスできないことを認識しておく必要がある。学びの場所で誰かが教えるという仕組みは、本当に悩み困っている人には近づきにくい。
- 提供の主体は色々あってよい。行政のほかに地域の子育てサークルなど。行政がすべてを効果的に実施できる訳ではないので、行政と地域が連携した役割分担も必要か。
- コモンセンスプログラムは、暴力や暴言を使わずに子どもを育てる技術を親に伝えることで、虐待の予防や回復を目指すプログラム。NPIは完ぺきな親などいないという意味なので、それを聞くだけで親も気が楽になる。BPプログラムは赤ちゃん向けのプログラム。(詳細はP10,11)
- 支援センターなどそれぞれの講座は1回きりのものが多く、参加者の課題はばらばらだが、このNPは回数や内容が決まっていて、効果が上がる根拠があるからやっている。なので、親がメンタルの部分で前向きに子育てできる有効性が認められているものをなるべくやった方がいいという流れがあり、日本でも進んできている。
- 鉄は熱いうちに打てではないが、大変な時に関わりを1つ持ってあげた方がいいのかも知れない。予防にお金をかけた方が予算的に負担は少ない。問題が出てしまったからのコストの方が大量にかかる。コスト的な問題だけでなく、その子どもの育ちがすごくゆがめられてしまうので、やはり早くに。

将来の親である子どもたちに対する『親育ち』の教育

- 親の育て直しは難しく、合理的に考えれば子どもにアプローチをして負の連鎖を断つ必要がある。
- 多くの大人がお手本となって、子どもに関わる機会を作っていくのが大事。
- 経験というところで小さい子をみる機会がほとんどない。養育能力を上げるためにどうするか。それは思春期の子どもたちも含めて、これから親になる親たちも含めて養育能力について、それこそ少子化にも関わってくるかもしれないが、課題となる。

課題に対する方策・支援に関する主なご意見②

人材の育成(地域の子育てのリーダー的な役割の人材や副専門職等の育成)

- 名古屋市では、NPプログラムのファシリテーター養成講座を毎年市が予算をとってやっていて、養成された人が地域にいて、公民館などを活用しながら取り組んでいる。
- 親教育プログラムは、10～30年くらいの未来を見据えて、継続してやっていくものだと感じた。ボランティアという感覚ではなく、イメージとしてはリーダーを育てる、子育てリーダー・ママリーダーと思う。そのリーダーが5年後にそういうことをやっていけるような、長いスパンで考えることが必要。継続したプログラムで、まずはリーダーを育てましょうという発想は良い。
- 子育てサークルはそれぞれに目的があって集まっているので、自分の子どもプラス自分が楽しいが基準になる。もうちょっと意識の高い、ボランティアではなく子育てを応援する立場として確立できる部分を養成していかないと、養成講座を開いてもいつまでたっても誰も来ない。
- 菰野町では、「子育てキーパーソン養成講座」を行いその参加者の中からさらにスキルが高い参加者に対してはスキルアップ講座を受講させ、最終的にはハイリスク事例へ保健師とともに訪問をさせている。

情報の提供(提供手法をさらに工夫)

- ホームページ、メルマガ配信等多様化してきたが、市民からいただくご意見としては、さらに充実してほしいという意見が多い。
- 悩み苦しんでいる人々にも情報が届くように、情報提供の手法はさらに工夫が必要か。
- 親から見てわかりやすいという視点が必要。

行政や地域でそれぞれ行われている子育て支援の連携

- 保健センターの全戸訪問は90%以上実施しているが、民生委員・児童委員、主任児童委員との情報共有がうまくいっていない。
- 事業の目的は同じなのに、やっている部署が違えばばらばら。それを一元化するのが要保護児童地域対策協議会だが、そこに集約しきれていないのが課題。
- 市役所の対応として、例えば、保健センターと子どもの家庭課は場所が離れていることもあって、なかなか連携が難しいと思う。これらの連携を図って、相談体制を構築してほしい。
- 四日市もそうだが、民間なり民生委員・児童委員及び主任児童委員(以下、「民生委員等」)に任せて、第一次予防なので全戸ローラーは民生委員等にまわってもらうようにして、そのシステムだけきちんと使ってハイリスクが漏れないように、あるいは第一子、第二子で課題のある人は民生委員等ではなく、保健師が完全に情報があるのでこれはいいですと保健師が行き、新しく生んで過去にも何も課題がないような一般的な人は民生委員等に全部回ってもらうようなシステムにすれば、改めて民生委員等ですとどうやってつながろうというよりも、1つの事業をそこに担ってもらう。

保護者同士や地域と保護者のつながりの支援・その必要性の啓発

- 最近の保護者は孤立しがち。親同士の関係、コミュニケーションが地域で機能していない。育児の不安や疑問は、他人に相談してアドバイスされることで疑似体験でき、学んでいくことができる。不安や疑問や成功体験などを共有できないために、保護者は困っているのだと思う。
- 親支援を市全体で取組むのは難しいので、小学校区や地区ごとの行事など各特徴を生かして保護者同士のつながりをつくっていきけると良い。
- 親自身のコミュニケーション能力が弱く、子育てサークルに頼らないとつながりを築くことは難しい。
- ひとり親家庭に対しては、色々な人の力を借りて子育てすること、子どもを積極的に地域に出すことをメッセージとして出したい。
- 多くの人に子どもに関わってもらう方が、子どもにとっても、保護者にとっても幸せになれるということ、子育ては保護者だけの問題ではないことを学んでもらうのが大事。
- 子育ては地域とつながっていないとできない。保護者が、子ども会の大切さ、地域のつながりの重要性を理解できれば、自発的につくるようになると思う。その際に行政としてできることをサポートしてほしい。
- 学ぶ機会というのは、教える人と教えられる人という関係に限定していない。同じような悩みを共有する人が集まり、相談したり他人の話を聞いたりすることで自ら気付く機会を設けることが大事。それには、どこかにつながれること、孤独に陥らないことがカギとなる。
- 呼びかけに反応しない親をどうしたら良いか。問題として浮き上がってきたもの、行政各機関に連絡が入ったものはそれぞれ対処していけばいいが、放っておけばいずれ問題となるものに対してどうアプローチしていくかが課題。
- 地域の校長先生のリーダーシップがポイントになると思う。また、校長先生がリーダーシップを発揮しやすいよう皆がサポートできると良い。
- 今話題になっているのは発見するという目的。発見の次には、お母さん達がちゃんと子育てできるようにすること。見つけるだけではだめなので。そこに虐待などの予防策を当てなければいけない。どれだけ目を細かくしても、抜け落ちてくる人が出てくるので、地域でどうするかを考えなければいけない。つながりや連携も課題。
- 昔は地域の公民館に、体重計を持って、母子保健推進員が毎月来ていた。何となく子育て中は、何故だかわからないが、特にミルクを飲んでいるときは体重の増減に一喜一憂する毎日だったので、そういうのが地域でつながるきっかけづくりになっていたのかなと思う。
- 母親が出産しても地域で支えてくれる人がいる情報もない。
- 菰野町では地区別に行って、そこに民生委員・児童委員、主任児童委員が入る。妊婦の時に。それでつながりができる。出産後の情報というよりも、産む前にその情報が得られた方が、電話しやすいし、SOSを出しやすい。もったいない。
- 0・1歳児でパパたちがつながっていると、その次の、例えば保育園や小学校でもパパたちがつながることに抵抗感がなくなるので、子ども会がないとしてもそういう一番大変な子育てを共有するという経験をパパさんたちにも。

【参考】委員からご紹介のあった具体的な取組事例①

○ 分科会の中では、各委員から次のような他市町村等の事例を紹介いただきました。

事例1: コモンセンスペアレンティング(CSP=Common Sense Parenting)

【「社会福祉法人 子どもの虐待防止センター」(東京都世田谷区)ホームページより抜粋】

コモンセンスペアレンティング(CSP=Common Sense Parenting)は、アメリカで開発された「被虐待児の保護者支援」のペアレンティングトレーニングのプログラムです。暴力や暴言を使わずに子どもを育てる技術を親に伝えることで、虐待の予防や回復を目指すものです。日本版が作成された2005年より日本でも普及活動が始まり、プログラムを終了した保護者の約8割によい変化があったという報告があります。

子どもの虐待防止センターでは28名の相談員がCSPのトレーナー資格をとりました。現在、CCAP内でCSPプログラムを開催しています。また、子ども家庭支援センター、保健センター、児童相談所、児童養護施設などの機関にトレーナーを派遣しCSPプログラムを実施しています。(定員6名程度、子の年齢が3歳以上の保護者)

■CSPプログラムは次のような構成になっています

1. 子どものマネジメントスキル訓練
 - * 子どもをしつけるのに有効な技法を学ぶ
 - * 親子の肯定的やり取りを促進することが目標
2. 認知再構成と問題解決訓練
 - * 子どもの発達段階に応じた適度な期待を学ぶ
 - * 複数の問題解決の方法をステップに分けて取り扱う方法
3. ストレスマネジメントと怒りのコントロール訓練
 - * 今ある虐待を止めるために怒りを制御する方法を学ぶ

事例2: Nobody's Perfect - 完璧な親なんていない(NPプログラム)

【「NPO法人こころの子育てインターねっと関西」(奈良県)ホームページより抜粋】

対象: 0歳～5歳までのお子さんをお育てるお母さん、お父さん

「Nobody's Perfect - 完璧な親なんていない(NPプログラム)」は、0歳から5歳までの子どもを育てる親を支援するためのカナダ生まれのプログラムです。参加者それぞれが抱えている悩みや関心事をグループで話し合い、つながりを深めることにより、仲間と互いに助け合って子育てしてゆくことを学びます。また、テキストを使いながら実際の子育てに必要な知識や方法を学び、参加者のみなさん一人ひとりが“自分にあった子育て”を見つけ、自分のやり方で、安心、かつ自信を持って子育てしていけるようになるものです。

親自身が学び、仲間と話し合い、協力しながら、子どもと一緒に成長していきましょう。

※NPプログラムは、専門家の個別対応が必要となるような深刻な問題をかかえるご家庭を対象にしたプログラムではありません。

■NPプログラムの目的と役割

- ・子どもの健康や安全、しつけなどについて学ぶ。
- ・すでに持っている子育てのスキルを高め、新たなスキルを習得し、練習する。
- ・自分の長所や能力に気づくことによって、親としての自信をつける。
- ・学習しながら子育て仲間を作り、息抜きとなる楽しい時間を過ごす。
- ・他の親御さんたちとのつながりを深め、助け合い、サポートし合える関係を作る。

事例3:親子の絆づくりプログラム"赤ちゃんがきた!"(BPプログラム)

【「NPO法人こころの子育てインターねっと関西」(奈良県)ホームページより抜粋】

対象: 第1子(0歳児)とお母さん

「親子の絆づくりプログラム"赤ちゃんがきた!"(BPプログラム)」は、初めて赤ちゃんを育てている母親と0歳児の赤ちゃんと一緒に参加するプログラムです。2010年11月に開催したKKI主催のフォーラムで発表し、翌年2月から実施しています。

受講形式で知識を学ぶだけでなく、参加したお母さん同士が話し合うなかで、育児の知識やスキル、親の役割などを一緒に学び、深めていきます。

初めから一人前の親などいません。ひとりで子どもを育ててゆくことはできません。まわりからのサポートを受けながら赤ちゃんを育て、少しずつ親になっていくのです。

※BPプログラムは、専門家の個別対応が必要となるような深刻な問題をかかえるご家庭を対象にしたプログラムではありません。

■ BPプログラムの目的と役割

・助け合える子育て仲間をつくる

・子育てに必要な知識を学ぶ

・0歳時期の"親子の絆づくり"

事例4:ペアレントトレーニングプログラム

【大阪大学現代GPプロジェクト「親と子の心を支援できる人材育成教育の構築」ホームページより抜粋】

ペアレントトレーニングは、子育てに取り組むご両親(養育者)が、その役割を積極的に引き受けていくことができるよう、親(養育者)と子どもを支援するために開発されたものです。

ご両親(養育者)は子どもを育てていく経験を通して、親(養育者)として成長していきます。その中で、子育ての先輩や支援者の手助けを借りることも役に立ちます。現在多くのペアレントプログラムが、支援者および子育ての先輩により実施されています。

軽度発達障害の子ども達はそれぞれに特徴的な困難をかかえています。それらの困難への具体的な対応の仕方について、多くのアイデアが提案・実施されています。その中でペアレントトレーニングは、「してほしくない行動」や「してほしい行動」といった子どもの行動に焦点をあて、具体的にどのような対応ができるかを学習していくプログラムです。ペアレントトレーニングをとおして、「親(養育者)ー子ども」間の"よりよいやりとり"を具体的に学び、親(養育者)としての自信を積み重ねていくことができます。

一方、ペアレントトレーニングを実施する支援者の立場からは、それぞれの家庭状況や、「ご両親(養育者)と子ども」の個性に応じて、これらのアイデアを適切に支援に結び付けていくことが大切となります。一人一人の個性に応じた子育ての方法を見つけるには、「ご両親(養育者)と子ども」の声にしっかりと耳を傾けることが大切です。本学でのペアレントトレーニングでは、特にこの点に配慮しながら、実践的な学習を行います。

分科会の報告・提言まとめ

- 今回策定する計画の計画期間(平成27～31年度)において、以上のような取組みを本市で重点的に進めていただきたい。
- この取組みを進めるにあたっては、分科会で議論したような現代の保護者の抱える悩みや問題点に十分目を向けながら、少しでも多くの保護者が子育てを楽しむことができ、「桑名で子育てしてよかった」、また「桑名で育てたい」と思えるようなまちを目指し、行政、関係機関及び地域の支援者などが相互に連携を図り、保護者を育て、支援していけるような様々な仕組みを構築していただきたい。
- また、これら特に進めていただきたい点については、全国に誇れる取組みとして全国各地に発信でき、ひいては市のPRにつながるよう重点的に取組んでいただきたい。

